

# *Mémoires de deux jeunes mariées* 小論

柏 木 隆 雄

1834年以来再三にわたって、Mme Hanska や、出版者達に宛てた Balzac の書間に見られる *Mémoires d'une jeune mariée* 及び *Sœur Marie-des-Anges* は、結局1841年末の *Mémoires de deux jeunes mariées* という作品の形をとって実現された。この作品はその年11月1日から翌年1月15日にかけて La Presse 誌に発表され、同年 *La Comédie humaine* の *Scènes de la vie privée* 第Ⅱ巻の巻頭におかれて出版され、Balzac の *La Comédie humaine* 最終プランに於て、*Scènes de la vie privée* の第三作目に位置し、現行の *Comédie humaine* の諸版もほぼそれに従っている。この間の事情は、Pierrot の編んだ Balzac の書簡集に詳しいのでここでは蛇足の筆を加えない<sup>1)</sup>。小論は、この作品の二主人公、Louise de Chaulieu と Renée de Maucombe の性格と運命をたどりつつ、この作品の持つ意味を探ることを目的とする。

## I

*Mémoires de deux jeunes mariées* は、その題名の示す通り、Louise de Chaulieu と、Renée de Maucombe という二人の貴族の娘の往復書簡を軸として、彼女達の書簡に加えて、二人の女性と直接に関わり合う青年達の書簡を適当に按配した純然たる roman épistolaire の形式をとっている。小説の中に登場人物の書簡を挿入する技巧・形式は、勿論、Balzacの「人間喜劇」中しばしば見られるし、代表作の一つである *Lys dans la vallée* も、謂ってみれば長大な書簡の体をなしたものであるが、ここで、純然たる書簡体小説と言うのは、いわゆる十八世紀の Richardson の *Pamela* を始祖とする伝統的書簡体小説の謂で、これは、長短篇併せて百篇に垂んとする「人間喜劇」の中でも、例外的なものに属して、題材を娘や人妻の愛情問題に絞った *Scènes de la vie privée* の諸篇で特異な位置を占める一つの要素でもある。書簡体小説の長所は、主観的な主人公の告白とそれを受けとる側のこれも主観的な返事のやりとりの背後に物語の推移を知り、読者が主人公の喜びや哀しみ、怒り等、恰も自分に宛てられたものであるかのように共感する反面、客観的立場で彼等の運命を鳥瞰し、判断し得るという点にあらう。Richardson の *Clarissa Harlowe* (1747—1748) が読者大衆の熱狂的歓迎を受け、一卷宛の続き物での刊行を待ち兼た彼等が女主人公の運命に一喜一憂したという逸話は、その事を裏書きするものである。しかし他方、叙述が冗慢、主情に流れやすく、安易な Sentimentalisme や鹿爪らしい論議で読者を倦ましめ巻を擲たしめる弊の生ずる可能性もある。

Balzac が *Mémoires de deux jeunes mariées* を執筆し始めたのは、先に述べたように、1840年前後である。当時既に18世紀流の書簡体小説の熱狂は薄れて、その形式も、ロマン派の詩人達の手垢に汚れていたはずのものである。Balzac がこうした書簡形式を彼の作品に採用したことは、この小説を鑑賞する上で留意して良いだろう。寺田透は書簡体小説の社会性に注目して、そうした書簡体小説一般を「書簡体を抵当として、ひとは客観的真

実性を借りる」と要約し、この小説がその点で成功していることを評価しているが<sup>(2)</sup>、勿論作者自身、それは百も承知のことだったに違いない。1838年8月8日附の Mme. Hanska に宛てた手紙で Balzac は、八年もの間 Carmélite の修道院にいて「ちょうど Montesquieu の Persan のように」Paris にやってきた少女を主人公とする小説のプランを語って、

..., et je lui (jeune fille) ferai juger et dépeindre le Paris moderne par la puissance de l'idée au lieu de se servir de la méthode dramatique de nos romans. C'est une jolie idée, et je la mets à exécution.<sup>(3)</sup>

と述べている。この小説は、*Mémoires de deux jeunes mariées* の前身とされている *Soeur Marie-des-Anges* の事であると考えられているが、同じ手紙で Balzac が、

Je suis en ce moment en train de faire une portion de mon livre d'amour qui sera détachée, je veux bien peindre une âme de jeune personne avant l'invasion de cet amour qui la conduira au couvent, j'ai trouvé juste de lui faire abhorrer les Carmélites où elle reviendra, au commencement de la vie où elle désire le monde et ses fêtes.<sup>(4)</sup> とあるように、彼は、始めは一人の少女の愛と魂のドラマを通して Paris の社会を描こうと思っていたようである。その目的のためには、修道院という別世界で8年間も過していた、いわば、精神的にも肉体的にも無垢な娘を選んで、未知の都会 Paris の善と悪を一度に体験させるという方法が一番手っ取り早く又効果のあるものであろう。これは伝統的に取られた方法で Montesquieu の *Lettres persanes* (1821) とか Smollett の *The Expedition of Humphry Clinker* (1771) 等に見る書簡形式であれば、更に諷刺の度が増すことになる。現在残っている *Soeur Marie-des-Anges* の草稿は、一つが手紙形式をとっていない断片であるが、他の草稿には、*Mémoires de deux jeunes mariées* の主人公 Louise de Chaulieu から Renée de Maucombe に宛てて書かれた第一書簡が見えるという<sup>(5)</sup>。Balzac がその最初の腹案である *Mémoires d'une jeune mariée* から *Soeur Marie-des-Anges* そして最終的に現在見る *Mémoires de deux jeunes mariées* へと至った過程は、彼の書簡集や諸家の研究を管見した限りでは正確に跡づけられるものではないが、草稿から判断しても、Balzac が生涯の傑作にすると息込んで取りかかり、やがて想を練り筆を下すに至って、一人の女性の生き方だけを描くのに満足できなくなったのか、或いは、それだけでは十分意を尽せぬと考えるに至ったからであろう。Bardèche も言うように<sup>(6)</sup>、

「Louise の運命が Renée の運命を喚起して」彼女のアンチテーゼとしての Renée de Maucombe をも含めた乙女二人の往復書簡へと想が発展していったものと思われる。Roman par lettres の効用は、先に記したように読者の共時的な同情、共感を誘い、作者が作中人物の思想、行動を彼等自身の言葉で背裏に浮かび上らせるところにあるが<sup>(7)</sup>、この作品においても、二人の女性のそれぞれの生き方が、二人の手紙の応酬によって鮮明に捉えられるよう配慮されている。*Scènes de la vie privée* と名付けられた諸篇は、たとえば *Père Goriot* においては Rastignac、*Béatrix* においては Calyste といった青年の目や行動を通して、というように、様々な角度や、表現様式を用いて若い娘や人妻の愛憎劇を描いたものであるが、Balzac は、それらの愛情の葛藤における表裏二面を、従来の外面からでなく、当事者達の書簡という形で、内面から、更に深く彫り下げようとしたのである。Balzac の1838年5月20日附の Mme. Hanska への手紙に次のような言葉が見える<sup>(8)</sup>。

Je n'ai jamais lu de livre où l'amour heureux ait été peint, Rousseau est trop rhétorique, Richardson est trop raisonneur, les poètes sont trop adorateurs des faits, et Pétrarque est trop occupé de ses images de ses *cocetti*, (...) Nul n'a décrit les jalousies hors de propos, les craintes insensées, ni la sublimité de don de soi-même.

そして彼ははっきりとはその題名を明かしていないが、彼の「青春の総決算たるべき」小説を企図していることを打ち明けている<sup>(9)</sup>。彼が従来の roman d'amour に欠けているとする les jalousies hors de propos, les craintes insensées は、まさしく、具体的な形をとって *Mémoires de deux jeunes mariées* の主人公 Louise de Chaulieu の性格と行動に生かされているのを吾々は発見する。Rousseau や Richardson に対する彼の批判は、殆どそのまま、言葉こそ多少違うが、Louise の手紙の中に反映しているのを見ることができる。

Il y aurait quelque chose de sinistre à recommencer *la Nouvelle Héloïse* de Jean-Jacque Rousseau, que je viens de lire, et qui m'a fait prendre l'amour en haine. L'amour discuteur et phraseur me paraît insupportable. Clarisse est aussi par trop contente quand elle a écrit sa longue lettre. (...) Celui (l'ouvrage) de Rousseau me fait l'effet d'un sermon philosophique en lettres.<sup>(10)</sup>

先に引いた Balzac の手紙と、この Louise の手紙から判るように、おそらく Balzac は、若い頃耽読した Rousseau の *la Nouvelle Héloïse* (1761) や Richardson の *Pamela* (1740), *Clarissa Harlowe* を十分意識した上で、それらを凌ぐ、上等の恋愛小説を意図したのであろう。彼等と同じ書簡形式を用いたところに、作者の意気どみと自負が見られるような気がする。再三に亘って、二人の女主人公が、とりわけ Louise が、Rousseau の *la Nouvelle Héloïse* や Richardson の *Clarissa Harlowe* を話題にとりあげたり、二人の運命と比較したりするのは作者 Balzac の対抗意識の現れでもある。しかし同時に、そうすることで、十八世紀風な Sentimentalisme への訣別をも暗に意味しているとも言えなくはない。つまり、この作品における書簡体小説の採用の効用は、このドラマの根本的状況設定にまで及んでいるのである。登場する二人の若い処女が十八世紀の小説を愛読し、ひいては、十八世紀の貴族、ブルジョワ社会の思想の下に Prérromantisme の影響も受けながら、修道院という一種世間の動きとは隔絶された別世界へ送りこまれていたという状況、更に彼女達が、その規律の厳格さで知られる Carmélites の修道院から再び 1820年代の王政復古の社交界へそれぞれ別々に、一人ぼっちの状態で放り出される、という状況は、十八世紀流の Roman par lettres によって一層の réalité を与えられて、読者を無理なく作品の雰囲気溶け込ませるのである。たとえば Louise が Paris の父 Duc de Chaulieu の館に帰って、Staël 夫人について、幼稚で無邪気な質問をして家族の揶揄を浴びるところ(第Ⅱ信)や、スペインの亡命貴族 Felipe Hénarez が、Louise のスペイン語の家庭教師としてあらわれ、彼女と恋におちるところは、*la Nouvelle Héloïse* における Julie と Saint-Preux の関係を想起させる(第XV信、第XXV信)など、更に *Clarissa Harlowe* 等の作品が既に記したように何度も彼女達の筆に載るのも、巧みな作者の演出上の欠かせぬ道具立てであろう。かくして Balzac は、Louise de Chaulieu と Renée de Maucombe という二人の無垢の乙女を修道院から脱け出させ、互いに近況を報告しあう親密な Correspondantes を創造し、十八世紀風の粉飾を加えながら、当代王政復古下の人間模様を彼女達の純情な、精一杯の生き方を通して描き出すのである。

II

この小説は、Louise de Chaulieuの弾けるような若々しい第一信から始まる。Carmélitesの寡黙と戒律の生活から解き放たれた喜びと、未知の世界へ飛びこんで来た期待とで少女らしい、とどまる所を知らない饒舌の手紙である。そうして、この饒舌の第一信で Louise その人をめぐるあらゆる状況が問わず語りに明らかにされていく。彼女は、Balzac が *Scène de la vie privée* の中で好んで取りあげる革命以前からの大貴族 Duc de Chaulieu の一人娘であるが、婚資に世襲財産をさかれるのを嫌った候爵が、伯母のいる Carmélites 派の修道院に送り込んでいたのである。彼女は幸いに祖母 la princesse de Vauréamont の遺産の相続権を得て Paris の屋敷に帰ってくる。そこは、家具調度の類いから華やかな宮廷生活の余香をとどめているのであり、彼女の少女時代の思い出を誘ってやまない。しかし彼女を迎える Chaulieu 家の肉親達は、それぞれの思惑を秘めて、どことなく他人行儀なよそよそしさがある。第一信から第四信まで、Louise は堰を切ったように Renée de Mauconbe という、嘗て同じ修道院に過して、今は彼女より先に修道院を出た友人に言葉を連ねる。夢多い Louise の手紙からは、Renée の正確な Portrait を描くことは出来ない。第五信の Renée が Louise に初めて返事をしたためるに至って彼女の人となりは、丁度、先の Louise の手紙が Louise その人を語ったように、明確なコントラストを持って吾々の前に明らかになる。およそ Balzac の登場人物は、周知の如く強烈な個性や Passion をもってあらわれるが、そしてそれは、しばしば単一の属性、maniacque な属性をもったものであるが、*Mémoires de deux jeunes mariées* における二人の主人公の全く対照的な性格は観念的に創造されたと言っていい程、歴然としている。二人の姉妹、あるいは友人が対照的に描かれている例は、*Scènes de la vie privée* の諸篇の中でも、たとえば、Virginie と Augustine の Guillaume 家の姉妹 (*La Maison de Chat-qui-pelote*)、Marie Angélique と Marie-Eugénie の姉妹 (*Une fille d'Eve*)、Béatrix と Camille Maupin (*Béatrix*) 等挙げることができようが、以上の人物と較べても、Renée と Louise 程作者が意識的に描き分けてはいない。第一信と第五信とを読むだけで、一方が Paris の大貴族の令嬢で、社交界や恋愛に憧れる女性、他方が、地方の貴族の娘で小金を貯めた田舎貴族の息子と結婚し、退屈だが、堅実な生活を送ろうとしているという違いが明らかになる。しかし二人の相違は、単にそういった外面的状況の差異だけではない。二人の手紙の書き振りに良く注意して読めば、彼女達の性格の差異を描き分けるべく、細心の注意が払われていることに気がつくであろう。以下例を追って考察してみよう。Louise の手紙で気づかれるのは、amour とか、rêve とか、fantaisie と言った観念的な抽象概念が好んで用いられることがまずあげられる。

Relève tes beaux yeux noirs attachés sur ma première phrase, et garde ton exclamation pour la lettre où je te confierai mon premier amour ou parle du premier amour.<sup>(11)</sup>

Nous avons tant rêvé de compagne, tant de fois déployé nos ails et tant vécu en commun, que je crois nos âmes sondées l'une à l'autre...<sup>(12)</sup>

l'essor de notre esprit ne connaissait point de bornes, la fantaisie nous avait donné la clef de ses royaumes...<sup>(13)</sup>

又、Paris の館に戻って来た時も、彼女は現実よりも過去を回想し、その想いはたちまち華やかな宮廷生活への憧れと同化するのである。

Je suis restée deux heures toute seule, reprenant mes souvenirs un à un, dans le sanctuaire où a expiré une des femmes de la cour de XV les plus célèbres et par son esprit et par sa beauté.<sup>14</sup>

以上の例は Louise が Romantique な思考の幻想や夢を好む少女という事を示している。一方、Renée の手紙には、そうした Romantique な夢想癖を示すような言葉は見当らない。Louise より早く修道院を早く出て、所謂「世間」を知っている彼女は、Louise の愛とか夢とかの饒舌に対して落ち着いた現実的な手紙を書いている。彼女の返事は、友人の浮かれ気味の華やいだものとは決して同調していない。地味な用語で、叙述は観察記録のように正確で具体的である。たとえば、彼女のいいなづけである Louis de l'Estrade とその家族の事を報告しているところも、

On voit que, depuis longtemps, la vie du baron consiste à se lever, se coucher et se lever le lendemain sans nul souci que celui d'entasser sou par sou. Il mange ce que mangent ses doux domestiques, qui sont un garçon provincial et la vieille femme de chambre de sa femme. (...) L'exilé, ma chère mignonne, est comme la grille, bien maigre ! Il est pâle ! il a souffert, il est taciturne. A trente-sept ans, il a l'air d'en avoir cinquante.<sup>15</sup>

とむしろ淡々と、そして鋭い目で観察して語っている。Louise のように言葉は多くないが、短い言葉で L'Estrade 家の田舎貴族たるところを活写し、併せて、その家に持参金なしに娘を嫁づける Maucombe 家の事情をも適確に言い尽している。ずっと後の事になるが、彼女の長男がふとした熱で危機に陥った時の報告は、(この個処は、George Sand もほめているが<sup>16</sup>) そのような状況の中でも自己を失わぬ冷静で細やかな観察に満ちたものである。

実際 Renée の手紙の中で彼女が使う言葉は確信があふれていて、Louise が nous avons tant rêvé とか、Suivant mon fantaisie とか、Depuis bientôt quinze jours, j'ai tant de folles paroles rentrées, tant de méditations enterrées au coeur などという言葉遣いを頻繁にするのと対照的に、*J'ai fini par deviner* que le retour inespéré de ce fils était la cause du mien とか、*J'aperçois* la vie comme un de ces grands chemins de France あるいは、*Je sais déjà* par avance l'histoire de ma vie といった言葉に見られるように、彼女の現実主義的な賢明さが浮き彫りになってくる。例を大体彼女達の最初の書簡からとったが、彼女等の差異は以後同じようなパターンを繰り返す。Louise は Combien la vie du coeur nous est nécessaire ! と書いたように、彼女の Sentiment の充足を求めて、Félice を愛するようになるし、Renée は Louis de l'Estrade との結婚によって地方貴族の良妻賢母としての地歩を固めて行く。Renée が Louise の華やかな感情生活を聞いて、

Tu seras, ma chère, la romanesque de mon existence. Aussi, raconte-moi bien tes aventures, peins-moi les bals, les fêtes, dis-moi bien comment tu t'habilles, quelles fleurs couronnent tes beaux cheveux blonds, et les paroles des hommes et leurs façons.<sup>17</sup>

と書いた通り、少女期を通じて同じ Carmélites 修道院で育った二人は、丁度一つの単体が細胞分裂して新たに二つの単体になるかのように Paris と La Crampade と二つに別れて人生を生き始めるのである。従って amour や aventures を語るのは常に Louise であり、家庭を語り、夫を誇り、政治を語るのは Renée なのである。理性に従って結婚した

Renée と、自己の感情に忠実に生きようとし、他者もまたかくあること女王のような態度で、Bardèche の言葉を借りれば、「吾と我が青春と恋狩る獵失に酔い痴れし Amazone の姫」<sup>18</sup> の如く要求する Louise は互いに反発し合いながらも、お互い相手が無くてはかなわぬように、一方の手紙が途断えれば、不安と叱責と揶揄の入り混じった手紙を書くのである。これは二人の人間を描き出すというよりも、一人の人格にある互いに相反発する感情と志向を、Renée と Louise という二つの人格に分けて観念的に作り出したのだとさえ思われてくる。彼女達を区別する要素はまだ挙げられる。たとえば Louise は18世紀から19世紀初頭の Romantique な小説を頻繁に引くし Renée は、

Pendant que tu lisais *Corinne*, je lisais Bonald, et voilà tout le secret de ma philosophie.<sup>19</sup>

と書いて、小説の類にそれ程関心を示さず、légitimiste の思想的支柱であった Bonald を読むのである。

更に彼女達の肉体的特徴も明確な差がある。Louise は、Blonde に青い眼で Renée はスペイン風の黒い髪と瞳を持っている。Jean Pierre Richard は、その Balzac 論に於いて肉体的特質とその文学的意味を探ったが<sup>20</sup>、彼によれば、Blonde はそれが火のように燃えたつものならば、情念の志向を示し、時には maléfique なものを予想させるが、青い眼も又不安な情緒を表わしているという。これに反して黒い眼は幸福な signe であるとしている。Louise は、第三信で自己の肉体の特徴を誇らし気に Renée に書き送るが、そこにも彼等の運命の差を印象づけようとする Balzac の意図が見られないだろうか<sup>21</sup>？

更にまた、Lovenjoul の草稿の中に、Balzac が *Mémoires de deux jeunes mariées* を書くにあたって友人の女性達に範を仰いだ、その一例であろう、彼の妹の Laure の筆になるとされる Renée から Louise に宛てた第一信、つまり第零信の草稿が残っているが、それを読んでみると、たとえば、

Ah ! Chère Louise, Combien les souvenirs de notre amitié parfument mon coeur et combien c'est bon d'aimer !

とか、或いは、

Il me semble que la terre, le soleil, le bonheur, tout est à moi !<sup>22</sup>

と言った表現が読まれる。これはこれまで検討してきた Renée の理性的で冷静な image に遠く、かえって Romanesque な Louise の書く手紙の雰囲気を漂わせている。勿論この作品を書くために Balzac が参考のために求めたものに違いなからうが、彼が、この草稿を実際の作品に Renée の手紙として採用しなかったという事にも、Balzac の周到な、主人公の二人の性格運命の差異を、表現法や属性で行おうとした準備が見られるのである。

### III

我々は、Louise と Renée の二人の人格をその措辞や用語や属性という面から分析してみたが、次に彼女達の idée に立ち入って考えてみよう。この作品で問題となるのは、やはり、他の *Scène de la vie privée* と同じように、結婚の幸、不幸であるから、性格として、情と知のお互い相反する idée を背負わされた二人が、どのような運命を辿るか検討してみる<sup>23</sup>。

Renée が彼女達自身について、

De nous deux, je suis un peu la raison comme tu es l'imagination<sup>24</sup>

と書いているように、結婚という彼女達にとって最も重大な関心事について、Renée が

Entre nous, je n'aime pas Louis de l'Estrade de cet amour qui fait que le coeur bat quand on entend un pas, qui nous émeut profondément aux moindres sons de la voix, ou quand un regard de feu nous enveloppe; mais il ne me déplaît point non plus<sup>25</sup>

と書き、更に、

Le mariage se propose la vie, tandis que l'amour ne se propose que le plaisir<sup>26</sup>と結婚の moral を説くのに対して Louise は忽ち、

Oh, j'aime mieux périr dans la violence des tourbillons de mon coeur, que de vivre dans la sécheresse de ta sage arithmétique (...), la philosophie sans l'amour ou sous un faux amour, est la plus horrible des hypocrisies conjugales.<sup>27</sup>

と応酬するのである。しかし吾々は Louise が益々激しく空想の世界に酔い、愛を享受していると自信して Renée に誇るように書いている時でも、それが、不安定な Passion でしか支えられていないという印象を禁じ得ないのに対して、Renée が Louise に与えた手紙は、最初のうちこそ抽象的な教訓や Louise の娘にありがちな得意気な様子で報告される華やかな社交界にかすかな羨望を感じたりするが、やがて、Louis との間に長男をもうけ、l'Estrade 家の一員として自覚するや、彼女の手紙は、一段と mariage de raison を確信をもって語るようになる。

Tu peux avoir les illusions de l'amour, toi, chère mignone; mais moi, je n'ai plus que les réalités du ménage. Oui, tes amours me semblent un songe!<sup>28</sup>

そうして彼女は、所謂 mon philosophe d'Aveyron の考えに大いに共鳴し、famille を la seule unité sociale possible と考え、その“société”に献身することを何よりも美德と考えて、彼女の父親の昇爵や夫の栄達のために奔走する。Renée は父親の le comte de Maucombe が marquis の爵位を得たいと中央で運動していることを述べて、

Mon père siège entre le centre et la droite, il ne demande qu'un titre; notre famille était déjà célèbre sous le roi René, le roi Charles X ne refusera pas un Maucombe.<sup>29</sup>

家名と王権を尊重し、又、あらゆる関係や掛引を利して中央政界へとの上がって行く地方貴族の思想を十分な余裕をもって理解するところまで成長しているのである。

一方 Louise は、少女時代に空想した中世騎士道恋愛に似た愛情を Félipe Hérénarez から得ることに成功し（彼がスペインの大貴族の出で、遠く辿れば maure の裔という事実も、彼女の Romanesque な精神を一層満足させたことであろう）、彼女の理想である、

plaisir à rendre un homme esclave d'un seul mouvement gracieux<sup>30</sup>

を味わうのであるが、彼女の結婚生活は、愛の永続、夫婦というよりは、愛人の関係を前提とするものであって、Louise の過剰な Sentiment と imagination の故に、しばしば Renée が、予感し警告する破滅的な志向を持っているものであった。無事に長男を出産した Renée の屋敷を訪問した時、Renée が自分の夫としめやかに語っているのを見咎めた Louise が、理由も告げず、置手紙を残して、Renée の館を引き揚げ、そのまま Macumer を伴って Italy に遊ぶところは、彼女の愛の形を見る上に興味深い場面である。彼女は Italy の美しい街で様々な景物や自然に吾を忘れ、夫というよりは愛人としての Félipe を見出して安堵するのだが、Louise が Renée に脅威を感じたのは唯単に Renée のスペイ

ン風の美貌から Félipe の嘗ての許嫁 Maria を思い起して疑心暗鬼が起ったためばかりではない。彼女の maternité に対してどうしようもない焦燥感を持ったのである。

Je vais te dire naïvement tout en quatre mots: je suis horriblement jalouse. Félipe te regarde trop. (...) Félipe enviait trop aussi cet enfant, que je me prenais à haïr. <sup>31)</sup>

この maternité の欠如は Louise という女性の極めて特徴的な、そして意味深い属性である。我々はこれまで、この小説を、知性と感性とのテーゼ・アンチテーゼの相克を図式的に理解してきたが、更にそれが、maternité 即ち fécondité と、stérilité の対立へと至るのを見るのである。

Louise は、二人目の子供を生んだ Renée に、羨望とも嫉妬ともつかぬ手紙を書き送る。

Pour la première fois de ma vie, ma chère, Renée, j'ai pleuré sous un saule, (...) Ta fécondité m'a fait faire un retour sur moi-même, qui n'ai point d'enfants après bientôt trois ans de mariage. <sup>32)</sup>

一方の Renée はその夫が最初の出産の時、

le lait est abondant, la nature est si riche en elle! <sup>33)</sup>

と Louise に書き送ったように、三人の子を賢く、そして立派に育てる（第四十五信）。Louise と Macumer が愛情の証しと忠誠に神経をすりへらしている時、Renée は誇らし気に長男の学業の芳しい事を語り、長女の愛らしく優しい事を連綿と幸福な母親として書き送っている。それは丁度 Louise が、嘗て Paris 社交界を牛耳っているきらびやかな生活を情熱を込めて書いたものと通ずるものがある。Louise は Renée に書かざるを得ない。

Une femme sans enfants est une monstruosité ; nous ne sommes faites que pour être mères. <sup>34)</sup>

Louise が Macumer と共に手を携えて行った Italy の地で、美しい自然に触れて感動したり、彼女達の愛の巢たる Champleurs, 更に夫 Macumer を失くした後めぐりあった青年詩人 Marie Gaston との Chalet の隠れ家の自然、それらを Louise が何と嘆賞し愛したか注意してみる必要がある。Louise は、彼女の愛の成就を nature と一体化することで確認しようとしたのではなかっただろうか。Louise には Renée について、彼女の夫が言った La nature est si riche en elle という、本来の、事物の生成力を意味する nature に乏しかった。彼女自身は不毛の宿命を負っているのである。彼女は自己の Stérilité の故に、彼女の愛情の対象に全霊を打ち込むことになるのである。愛の隠れ家のある Chalet の森を二人だけで散歩する Louise と Marie Gaston は通り雨の過ぎた落葉の小道を黙って、「聖なる自然」の中で幸福の時を味わう。そして Paris の社交界に一矢を酬いた気になるのである。

Si tu savais ce qu'il y a de miel et de profondeur dans une baiser presque timide qui se donne au milieu de cette sainte nature... C'est à croire que Dieu ne nous a faits que pour le prier ainsi. Et nous rentrons toujours plus amoureux l'un de l'autre. Cet amour entre deux époux semblerait une insulte à la société dans Paris. <sup>35)</sup>

Louise の愛が、始めは Félipe に、そして彼の無き後は Marie Gaston へと向けられたことは興味深い。彼等がいずれも société からは或る意味ではみ出した人間であることに



注意しよう。Félipé はスペインの名家の出であるけれども、国王の側に待していながら、王政顛覆を計って失敗した亡命者であり、Marie Gaston は、門地、門閥から見離された、ひ弱な美貌の貧乏詩人に過ぎない。しかも彼は、*la Grenadière* のヒロイン lady Brandon の不義の子の一人なのである。彼等が二人ながら、poète であること、気高い純粋な精神の持ち主であるのは必ずしも偶然でない。Louise は自分の不安な感情を次のように告白している。

Il y a je ne sais quel appétit en moi pour les choses inconnues ou, si tu veux, défendues, qui m'inquiète et m'annonce au dedans de moi-même un combat entre les lois du monde et celle de la nature. Je ne sais pas si la nature est chez moi plus forte que la société, mais je me surprends à conclure des transactions entre ces puissances.<sup>36</sup>

Louise と Marie Gaston の愛が彼女の“hors de propos”の嫉妬によって破綻し、彼女が自ら命を断つ原因が、二人だけの Chalet の隠れ家が Paris の社会へと Marie Gaston の嫂の出現によって結びついたという事であったのは象徴的ではなかろうか。

一方、Renée は、彼女が両親の政略的意図によって、隣人の貴族 Louis de l'Estrade と結婚するべく、修道院を出た事を理性の判断によって同意した時点から既に société の方へと歩を進めたと言える。Louise が愛や自然の景物を感動して讃えるように彼女は société と nature の調和を説く。彼女における nature は万物の生成力を意味しており、社会秩序の根底をなす nature であって、人間の本性的なものの意味は薄い。彼女は、結婚が決った時、オレンジやレモンの木々、その他様々な植物がたわわに実る果樹園を我が家の周りに作ることを夢見るが（第五信）、ここにも彼女が、nature をその豊饒さ fécondité の象徴として彼女がその秩序に同化したいという希求を無意識のうちに示している。従って結婚後の彼女は、所謂普通に言うところの自然を語らない。彼女は、自ら nature を求める必要はない。彼女の子供達が nature の結実の証しであり、彼女の幸福の拠り所なのである。彼女は自信をもってこういう。

enfin l'amour peut et doit cesser; mais la maternité n'a pas de déclin à craindre, elle s'accroît avec les besoins de l'enfant, elle se développe avec lui. (...) Notre soif de dévouement y est satisfaite, et nous ne trouvons point là les troubles de la jalousie. Aussi peut-être est-ce pour nous seule point où la Nature et la Société soient d'accord. En ceci, la Société se trouve avoir l'esprit de famille, par la continuité du nom, du sang, de la fortune.<sup>37</sup>

母の周囲に子供がいて、その彼等の上に一家の長としての父親がいる。そうしてその父親の核とした家族の集団の上に王がある。これが Renée の考える社会秩序であり、それが Louise の父 Duc de Chaulieu の意見と軌を一にしているのは注目している。しかし重要なことは、やがて政界で実力を持ち、着々とその勢力を伸して行くのは、野心家の大貴族 Duc de Chaulieu よりも、彼が「大衆選挙によって吐き出されてきた」<sup>38</sup> と言う Louis の如き人物であろう。Balzac の手腕は二人の若妻の愛や結婚についての一見多愛もない女らしい応酬の背後から、そうした当時の政治状況をも垣間見させるところにある。吾々は、専らこの二人の女性の生き方の明暗を中心に述べてきたが、それは取りも直さず二つの異った結婚の生態を通して、当時の社会と直面することであり、この小説が、正面から政治を取り扱った小説以上にそれは観念でなく具体的 image を伴って浮

き彫りにされているのを知るのである。

#### IV

*Mémoires de deux jeunes mariées* が果して彼の言う「彼の青春の総決算たるべきもの」として上等の Roman d'amour であるかどうかは、議論の余地は猶あるかも知れない。しかし一途の恋愛を貫こうと自己の感情に忠実に生きた女性の青春と蹉跌を描いたものとして、十分評価し得る。しかもその Antithèse としての賢明で徳の高い女性の平穩な家庭生活を同情をもって対比させることで、一層彼女の恋愛の殉教者たる側面をうき彫りにさせ、Hesse の *Narziss nud Goldmund* に至る「知と愛」の相克の一連の西洋小説の流れに位置する佳篇といえよう。恐らく本を読み了えた大半の読者は、George Sande と共にこう言うであろう。

J'admire celle qui procrée, mais j'adore celle qui meurt d'amour.<sup>(38)</sup>

#### NOTES

- (1) H. de Balzac, *Correspondances*, 5vols (édition de R. Pierrot), édition Classique Garnier  
H. de Balzac, *Lettres à Madame Hanska*, 4vols (édition de R. Pierrot) édition, Le Delta.  
*Mémoires de deux jeunes mariées* に関しては、特に前者の第四巻、後者は第一巻及び第二巻
- (2) 寺田透「バルザックー人間喜劇の平土間からー」P. 39—40 現代思潮社
- (3) H. de Balzac, *Lettres à Madame Hanska*, tome I, P. 612
- (4) *ibid.* P. 612
- (5) notice pour *Mémoires de deux jeunes mariées* in *OEuvres complètes de Honoré de Balzac*, éd, Club de l'Honnête homme, P. 205—207 Appendice, P. 702—706
- (6) M. Bardèche, notice pour *Mémoires de deux jeunes mariées* in *OEuvres complètes de Balzac*, éd, Club de l'Honnête homme, P. 210
- (7) 書簡体小説については、*Liaisons Dangereuses* を分析した Tzvetan Todorov, *Littérature et Signification*, Larousse がある。
- (8) Balzac, *Lettres à Madame Hanska*, tome I, P. 600—601
- (9) *ibid.* P. 601
- (10) *OEuvre complètes de Balzac*, tome I édition, Club de l'Honnête homme, P. 258—259  
テキストは、上記の全集を使用した。他に Pléiade 版, Seuil 版を参考したが、以下、OC の略号で記す。
- (11) OC, P. 221
- (12) OC, P. 221
- (13) OC, P. 222
- (14) OC, P. 227
- (15) OC, P. 242
- (16) Balzac, *Correspondances*, Tome IV, P. 406
- (17) OC, P. 244
- (18) M. Bardèche, *Une lecture de Balzac*, P. 241 éd, les sept Couleurs
- (19) OC, P. 286
- (20) Jean P. Richard, *Corps et Décorps balzaciens* in *Etudes sur le Romantisme* éd, Seuil.  
ここで問題としているのは、P. 27及び P. 42
- (21) OC, P. 235 Louise はこう言う。  
mes yeux bleus ne sont pas bêtes, ils sont fiers (...) je ne suis pas une blonde fade et à

évanouissements, mais une blonde méridionale et pleine de sang, une blonde qui frappe au lien de se laisser atteindre.

又 Renée はこう言う。

Voilà donc mes cheveux noirs, mes yeux noirs dont les cils se déplient, selon toi, comme des jalousies, mon air imperial et ma personne élevés à l'état de pouvoir souverain. p.274

これらの肉体的特徴と Richard の所説との関連は極めて興味深い。

(22) OC. appendice 4 P.707

(23) Balzac の親友 Félix Divan は, 1834年 *Etudes de Moeurs au XIX<sup>e</sup> siècle* が刊行される際その序文にこう記した。

Dans la Scènes de la vie privée, avons nous dit ailleurs, la vie est prise entre les derniers développements de la puberté qui finit, et les premiers calculs d'une virilité qui commence. (...) là, pour les femmes, le malheur vient de leurs croyances dans la sincérité des sentiments ou leur attachement à leurs rêves que les enseignements de la vie dissiperont.

OC. appendice. I. P.672

(24) OC. P.336

(25) OC. P.256

(26) OC. P.268

(27) OC. P.276

(28) OC. P.309

(29) OC. P.343

(30) OC. P.257

(31) OC. P.334

(32) OC. P.348

(33) OC. P.322

(34) OC. P.349

(35) OC. P.377

(36) OC. P.293

(37) OC. P.329

(38) OC. P.261

(39) Balzac, Correspondances, tome IV. P.407